

素人小説

第19回「就職活動で知った生き方」



株式会社 BSO

1 第19回「就職活動で知った生き方」

- ・ 順風満帆な学生時代
- ・ 大企業に対して感じたこと
- ・ 衝撃を受けた出会い
- ・ 社員が輝いている企業との出会い
- ・ 大学4年で学ぶ楽しさを知る
- ・ 社会人になる決意

「順風満帆な学生時代」

伊藤和子は一人っ子。伊藤の父は高校の化学の先生で、母は中学校の先生である。母方の祖父母は近所に住んでおり、両親は祖父母とともに宝物のように大切に、何不自由なく育てた。伊藤本人も、恵まれた環境の中で、大切に育てられたという自覚を持っている。

伊藤の祖父母・両親は、伊藤に勉強を強制することはなかった。伊藤は学習塾にも人並みに通ったが、がむしやらに勉強するタイプではなかった。むしろ、勉強することよりも「遊ぶ」ことに関心を持つことが多く、この傾向は、成長するにつれ強くなった。両親は自由にさせてくれ、それでも成績は小学、中学、高校、大学を通していつもトップクラスにいた。

周囲の人々は、伊藤が東京の一流大学に行くものと思っていた。しかし、伊藤は、地元国立大学に推薦で入学した。経済学部に入るが、「大学でやりたいこと、学びたいことがあるから」ではなく、大学は誰でも行くものだから行くという意識しかなかった。大学での学びはこれといった興味を抱くことはなく出席率も程ほどであったが、「優」で単位取得するために努力した。

「大企業に対して感じたこと」

まさか就職にこれほどまでに苦勞するとは思っていなかった。恵まれた環境で、成績も優秀、人にも好かれるタイプの自分を求めない企業がとは考えられなかった。

最初は自分が希望するところに就職できるから、すぐ決める必要もなく、出来るだけ若いときをエンジョイして、就職活動も楽しもうと思った。伊藤は自分が大企業に就職することは当たり前のことだと思っていた。地元で開催される会社説明会には、自分が行くような会社は参加してはいないと思っていたので行かなかった。

学校の求人リストにある大企業を数社選び、会社訪問するために東京に行ってみた。日曜の東京の街は、地元の社会とは別社会だ。社会人ここで生活していくのかと思うと気分が高まった。翌日、1社目の企業に始業時刻10分前に訪問したところ、もう既に沢山の学生で行列が出来ていた。1時間20分待ってやっと中に入ることが出来た。

会社説明会では、何100人単位で1部屋に入り、機械的で一方的な説明と会社の概要等の印刷物が配られるだけであった。待っている時間と入室する時間が殆どで、会社の説明はなかった。こちらから聞こうと思っても、「インターネットの就職Q&A のところでお願います」と丁寧ではあるが、機械的に対応されるだけであった。大企業には「個人」という意識はないのかと思った。どのような人間であれ、「社会人」となるときの門出

というものは、一生に一度しかないもので、お互いに大切にすべきこと」ではないのかと思うと無性に腹が立った。「こんな会社に誰が入ってやるか。」これが伊藤の就職活動の最初の感想であった。

2 社目に行った。殆ど同じであった。3 社目に行った。「申し訳ありませんが、会社説明会は、午前中だけにさせて頂いております」という張り紙で入ることさえ出来なかった。伊藤にとって就職活動の初日は最悪だった。3日の予定で東京に来ていた伊藤は、「明日に期待しよう」と自分を慰め、父親が手配してくれたホテルで眠りに入った。しかし結果は翌日も、そして翌々日も同じだった。

伊藤は大企業の求人態度に腹が立った。「その人」を受け止める前に、機械的に「いや」「虫けら」のように扱うことが許せなかった。

「衝撃を受けた出会い」

伊藤は就職先を地元で名の通っている中堅企業に方向転換することにした。商工会議所が開催した会社説明会に出席し、100社ほどの参加があった。中堅企業では人事担当者が会社を説明していた。

5 第19回「就職活動で知った活き方」

伊藤は、面白いことを発見した。人事担当者への対応には東京での大企業の会社説明会的雰囲気を感じた。大企業よりは十分懇切丁寧ではあるが、やはり「その人」を見ておらず、関心を示さない。関心を示すのは、口には出さないが「成績」のことだけである。伊藤は、いくつかの会社から興味を持たれたが、それは成績が優秀だからだと分かっていた。目に留まり嬉しい一方で、成績以外の「自分」にあまり関心を示してくれないのが淋しかった。とりあえず2社訪問する約束をした。

時間があつたので聞いたことのない中小企業もいくつか研究してみようと考えた。面談にきた学生を掴まえては、一生懸命に大声で話している「オジサン」のところに行った。

そのオジサンは、「社会がどうの」「得意先がどうの」「業界がどうの」「うちの製品がどうの」とにかく一方的に話しているが、伊藤が聞いたこともないような単語が頻繁に出てくるし、何か外国語を聞いているようで、さっぱり分からない。そのオジサンは、自分の話が一段落すると、今までの話への感想を求めた。伊藤が無言で目の玉をクリクリさせていると、次から次へと質問をしてきた。伊藤は無言でただ黙っていることしかできなかった。矢継ぎ早に問い掛けられた経験がなく、またこんなにも知らないことに接したことがなかったからだ。

ショックだった。自分が惨めだった。こんなにも知らない社会があるとは思ったことがなかった。そんな状態を察して、オジサンは、話のトーンを変え、伊藤に話しかけた。「何がしたいのか?」、「どんな生き方をしたいのか?」色々と聞かれるのだが、「面接用に準備していたことはこのオジサンには通用しそうもないことに気がして、黙り込みを続けざるを得なかった。オジサンの質問を受け、自分の人生について何も考えていないことが情けなかった。伊藤は、そのオジサンの前にこれ以上いることは、自分の存在性のなさを明確にされているようで怖くなった。

相手があっけに取られている状況の中で、伊藤は恥ずかしく挨拶もせず急に席を立ち一目散に出口に向かった。伊藤にとって、この出来事は新鮮でもあったが、強烈に焼きついた。「自分の人生設計」を持たずして社会人になろうとしている自分を鑑み、大変なことをしでかしていると思った。

「社員が輝いている企業との出会い」

伊藤は、数日経ってもまだあのオジサンの強烈な印象が残り、もやもやした気持ちにあった。

会社説明会の時に約束した2社を訪問した。1社目は、説明会の際の担当者が会社の

中を案内してくれた。社員は黙々と机に向かい仕事をしているか、急ぎ足で行き来しているかのいずれかであった。アルバイトのときに経験した職場とは大分違っていた。張り詰めた空気で、雑談などができる雰囲気はなく、息苦しかった。社内の見学を終えてから、人事の課長さんと面会した。学校でシミュレーションした時と同じ標準的な質問がなされた。型どおりに答えて、そそくさと伊藤は失礼した。この会社には、何の感情も抱けなかった。伊藤は、就職活動ということも忘れて、何かの機会にたまたま会社見学しているかのような錯覚さえ持つ始末だった。

2つ目の会社は、担当者と共に玄関に社長が迎えに出ていた。就職希望者が会社訪問するのに社長が出迎えてくれるという話は聞いたことがなかったが、そこまで気にすることもなく会議室らしきところに通された。

社長が自分ひとりを前に、自分の事業、自分の会社について話してくれた。説明会のときの担当者の機械的な話しとは全く結びつかず戸惑いさえ覚えた。この社長の話は、話し振りや話している内容は違うが、あの説明会のオジサンを連想させるものがあった。伊藤は、やはり説明会のとくと同じように、内容を理解することが殆ど出来なかった。この社長は、それを察してか、学校の授業で聞いたことがあるような言葉を使い始めた。確かに学校で聞いたことがある言葉ではあるが、内容が分からない。しかし、社長は根気強く伊藤に話しをした。伊藤はその熱意に負け、「私のために色々仰っていたらいいことだ

わからないのです」と白状せずにいられなかった。この社長は、「こうはつきりと白状されるはこちらが困るね」といって話を止めた。

社長は話を止め、自分の学生時代のことを話し始めた。自分も学生時代に勉強しなかったこと、自分が生涯かけてやりたいことを何も考えずに社会人になってしまったこと、あまり考えることもなく親父の会社を継いでしまったことなどの話であった。そして、いまその生き方の拙さを感じ、若い人たちに同じ間違いをおかしてほしくないとのことだった。また、若人は社会の財産であり、学校教育は社会が社会のためにする先行投資であること、若いときは人生を謳歌したいが、一方で若いときに学ぶべきことは学んでおかないと後では取り返しがつかないことになるという。伊藤は、ただ聞くだけであった。会社の見学をさせてもらったとき、表面的にはどこの会社も変わったところがないようであったが、社員が光って見えた。この会社の社員が羨ましかった。このような社長の下で社会人として「活きて」いけることが羨ましかった。

しかし、一方で今の自分はこの会社に入る資格がないことを悔やんだ。伊藤は思い切つて、この社長に申し出た。「この会社で活きてみたい。入社させてください。入社する日まで、やらなければならぬことに全力を注ぎます。」

「大学4年で学ぶ楽しさを知る」

伊藤もやはり他の学生と同じようにアルバイトをした。アルバイトに明け暮れるということはなかったが、アルバイトを3つ掛け持ち、職場には色々あるという事も知ることができた。しかし、あのオジサンやあの社長のような人はアルバイトのどの職場にもいなかった。また、あのオジサンが話したような事業や仕事についての会話もなかった。アルバイトで知った会社は、友達との日常的会話の延長線のようなところで、特別に変わった会社であるという認識はもっていなかった。

なぜあのオジサンが垣間見せてくれた「会社」のイメージとは違うのかを伊藤はまず考えた。立場が違うこともあるだろう。しかし、どう考えても立場が違うだけではなさそうだ。やはり、活き方が違うのだと思いたかった。それが良い証に、アルバイトで知った会社の経営者には、あの2人から感じ取ったものはなかった。

自分の活き方について考えた。自分の「人生設計」について考えることにした。いざ考えようとするとなんか考えて良いか分からなくなった。これまで考えることをしてこなかったことに悔やまれたが、仕方がない。改めて勉強し直すことから始めることにした。とにかく大学で勉強したはずのモノについて改めて勉強することにした。昔の本をひっくり返して読み始めた。すると新しいことばかりで、分からないことだらけである。復習のはずが復習ではなくなった。毎日時間を決めて勉強することにした。分からないことは、調

べるために図書館に行った。それでも分からないことは、学校の先生のところに聞きに行った。尋ねた先生達は、ほとんど皆同じように「どうしたのかね」と不思議がっていた。先生は胡散臭そうではなるが答えてくれた。始めは面白くも何もなかった。しかし、一つひとつ学び理解できるにつれ、楽しくなった。伊藤はあの社長が話してくれた「勉強はその人の人生を広げてくれるもの」という話を思い出した。確かにそうだと実感を味わえるようになってきた。

「社会人になる決意」

大学で学んだことの復習はほぼ終わった。4月からあの社長の会社の社員になる。伊藤もキラツと光る社員になることを目指して頑張ってきた。まだ「私の人生設計」は出来上がっていない。入社日までには、自信を持ってあの社長に表明できるものを作り上げる。

まだ、3月末までにやらなければならないことは沢山ある。しかし、心には晴々とした未来に向かった楽しみがあった。4月の入社日が楽しみだ。自分で歩く人生がこんなに素晴らしいスタートで始まることを誰かに感謝したい気持ちで一杯になっていた。